

「流星を掴んで」

登場人物

マグヌス・フィロン(10)、(18)、(21)メテオール星のフィロン 王
国の王子
マグヌスがモデルのアンドロ
イド
マグヌスの友達
ヘレンがモデルのアンドロイ
ド
フィロン王国の王

アルキタス・フィロン(50)
兵隊1、2、3
兵隊(アン)1、2、3
王国警察隊

○地球・シュプレー川・水中（夜）

マグヌスが（アン）ヘレン（アン）を抱え、ゆっくり沈んでいる。

川の中から夜空が見え、無数の流れ星が流れている。

マグヌス（アン）、夜空に手を伸ばし、何かを掴もうとするが、虚しく水を掴むだけ。そして、口をパクパクし、何かを話そうとする。

静かに目を瞑り、ヘレン（アン）を抱えながら、暗い川底に沈んでいく。

タイトル「流星を掴んで」

○地球・アルフレッドブレメンハウス自然公園（夜）

兵隊達（アン）が銃を持ち、辺りを捜索している。

○同・茂みの中（夜）

マグヌス（アン）とヘレン（アン）、
じっと息を殺し、隠れる。マグヌス（
アン）は黒いローブを羽織り、フード
を深々と被っている。

マグヌス（アン）、ヘレン（アン）を
見つめる。

そして、夜空を見上げる。

○（回想）メテオール星・丘の上（夜）

夜空に沢山の流れ星が流れる。

マグヌス・フィロン（○）とヘレン・ビ

ザンチウム（○）、寝転がる。ヘレン、

流れ星に手を伸ばす。

マグヌスは不思議そうに問いかける。

マグヌス「何してるの？」

ヘレン「地球ではね、流星を掴むと願いが叶
うと言われているんだ。それで掴もうとし
てる。あつ掴むって言っても本当に掴む訳
ではないよ。お空に向かって手を伸ばして、
流れ星が流れたら、空を掴む感じ。もし、

掴むタイミングで流れ星を手の中で消えたら、願いが叶うという感じかな」

マグヌス「変なの、捕まりっこないよ」

ヘレン「そんなことないよ。捕まえて、願いを叶えてもらうんだ」

マグヌス「どんな願いを？」

ヘレン「みんなが笑顔になれる世界になるように」

ヘレン、流れ星を掴み損ねる。

○地球・アルフレッドブレーメンハウス自然公園・茂みの中（夜）

夜空を見上げているマグヌスがヘレン（アン）の顔に向き直す。ヘレン（アン）、無表情でマグヌス（アン）を見つめる。

○（回想）メテオール星・丘の上（夜）

マグヌス(10)とヘレン(10)、並んで立ち、夜空を見上げている。

夜空に赤く光る点光源。

ヘレン「できたね、人工流星衛星」

マグヌス「（笑顔）うん」

ヘレン、マグヌスに微笑む。

ヘレン「すごいね、あなたのアイデアでここまで来たんだわ」

マグヌス「これで成功したら、地球人も少しは未来に期待を持てるかな」

ヘレン「（笑顔）勿論。地球はメテオールみたいな滅多に流れ星が見えないから希望だよ」

マグヌス、笑いかける。

ヘレン「地球でも早く見てみたいな」

マグヌス「そうになったら、見に行くよ」

ヘレン「生身で？」

マグヌス「えっ？アンドロイドのつもりだったけど」

ヘレン「勿体ないよ、生身で来なよ」

マグヌス「んー、一応王子だから、そう簡単には星を出られないから…」

ヘレン「それでも、頑張つて、ね」

マグヌス、考え込むが、

マグヌス「んー、（微笑む）黙って抜け出すか」

ヘレン「絶対に来てね。一緒に見よ。そんで、いっぱい、お願いしよう」

マグヌス、笑顔で頷く。

ヘレン「あっこんな伝説が。あまりにも想いが強いとアンドロイドに魂が宿るんだって」

マグヌス「それも変なの」

ヘレン「こつちの方も私はなんとなく信じていたり。もし、アンドロイドに魂が宿ったら、神秘的だね。ほら、アンドロイドて一応通信して本人が動かしたり、話したりするけど、やっぱりどこか無機質で心が籠もっていないように思えるんだ」

マグヌス「そうかな」

ヘレン「その感覚持つてよ。だからさ、アンドロイドに魂が宿ったほうがね：人間らしくなるかなって信じてる」

マグヌス「ふーん」

ヘレン「（笑顔で）興味なしか」

夜空の赤い点光源が点滅する。

ヘレン、点光源を指差し、

ヘレン「あつ、始まるみたい」

マグヌス「なんか緊張する」

マグヌス、少し身体を震わせる。ヘレン、

マグヌスを抱きしめる。

ヘレン「大丈夫だよ」

マグヌス「うん・・・」

マグヌスとヘレン、一緒に赤い点光源を

期待の

眼差しで見つめる。点光源をから、無数

の星屑

が透過され、夜空を流れる。

マグヌス「綺麗・・・」

ヘレン、嬉しそうに流れる星屑に手を

伸ばそ

うとする。

ヘレン「実はね、私、もう一つ願いがあるの」

マグヌス「どんなの？」

ヘレン「それは…（少し顔が赤くなる）やっぱり止めた」

マグヌス「え？え？そこでやめる？普通」

ヘレン「（笑顔で）また…何処かでね」

マグヌス「はあ〜」

ヘレン、夜空を見上げる。

× × ×

暫し、夜空の流れ星を眺めている二人。だが、一つの星屑がこちらに落ちてくる。ヘレンとマグヌスが困惑する。

マグヌス「えっ？こつちに來てる？」

ヘレン「（慌てる様子で）危ない」

ヘレン、マグヌスを突き飛ばす。

マグヌス、遠く突き飛ばされ、ヘレンに星屑が落ちる。落ちる瞬間、ヘレンは微笑えむ。

○地球・アルフレッドブレーメンハウス自然公園

・茂みの中（夜）

マグヌス（アン）、ゴーグルを外す仕
草をし、

目を腕で擦る。

○メテオール星・マグヌスの部屋の中（夜

）

マグヌス、VRゴーグルを外し、涙を
貯めた目を腕で擦る。また、付け直す。

○地球・アルフレッドブレーメンハウス自然

公園・茂みの中（夜）

マグヌス（アン）、ヘレン（アン）
の両肩を掴み、

マグヌス（アン）「お前を絶対に守る」

ヘレン（アン）「（機械的に頷き）うん」

兵隊1（アン）の声「居たか？」

マグヌス（アン）、ヘレン（アン）と
一緒に小さく

く身を潜める。

○同・マグヌス（アン）達の側（夜）

兵隊1（アン）、兵隊2（アン）に近づく。

兵隊2（アン）「いや、居ません」

兵隊1（アン）「チツ、あの男のアンドロイドと鍵は何処行った」

兵隊1（アン）の口からアルキタス・フィロン(50)の怒鳴り声が鳴り響く。

アルキタスの声「（怒鳴るように）まだ、見つからんのか、無能共」

○メテオール星・フィロン王国・司令室（夜）

アルキタスの前にVRゴーグルを付けた兵隊達が並んでいる。

兵隊1「ハッ、申し訳ございません。搜索範囲を広めます」

アルキタス「さっさとしやがれ」
兵隊1、アルキタスに敬礼し、

兵隊1「ハッ。皆の者、西の方も搜索しろ」

兵隊達 「ハッ、只今」

○地球・アルフレッドブレーメンハウス自然
公園・マグヌス（アン）達の側（夜）

兵隊1（アン）と兵隊2（アン）も散
らばる。

○同・茂みの中（夜）

マグヌス（アン）茂みの隙間から向こ
う側を見る。向こう側で兵隊達（アン）
が走り回っている。

マグヌス（アン）「ここに居ては見つかるの
も時間の問題だ。何処か他に隠れる所へ行
かないと」

マグヌス（アン）、考え込む。

ヘレン（アン）「では、あそこではどうでし
ょう？」

マグヌス（アン）「あそこ？」

ヘレン（アン）「はい、アルヒエンホルト天
文台です」

マグヌス（アン）「そこは・・・」

風が吹き、マグヌス（アン）が被って
いるフードが脱げる。

○地球・アルヒェンホルト天文台前（夜）

朽ちた天文台、蔦が巻き付いている。

マグヌス（アン）、フードを取り、驚
きのあまり立ち尽くす。

マグヌス（アン）「ここがヘレンの大好きだ
った場所・・・」

ヘレン（アン）、マグヌス（アン）の
手を取り、

ヘレン（アン）「入ろう、ここなら身を隠せ
れるはず」

マグヌス（アン）「ああ・・・」

夜空に流れ星が流れる。それを一瞬マ
グヌス（アン）は見たが、見て見ぬ振
りをする。

○同・望遠鏡室（夜）

室内は塵一つなく、望遠鏡は所々小さな錆はあるが、綺麗である。主鏡もピカピカと輝く。

マグヌス（アン）、室内を見渡す。

マグヌス（アン）「これは、君が綺麗にしているのか？」

ヘレン（アン）「はい、ヘレン様の好きな場所とインプットされているので、手入れしております」

マグヌス（アン）「私はこの場所のことはヘレンから話をよく聞かされていたんだ。この場所はヘレンにとって、地球を救う場所の一つだと・・・」

ヘレン（アン）「はい、ヘレン様は星空が希望の象徴なのだとは本当に信じておりました。そのため望遠鏡で星空を見て、地球の人を幸せな日々を、未来を作り出したかったのです」

マグヌス（アン）「ヘレンの思いを壊す訳ではないが、望遠鏡が無くても、星空を見え

るのでは？」

ヘレン（アン）「ヘレン様が望遠鏡に拘る理由はそれ以外にもあります」

マグヌス（アン）「それは？」

ヘレン（アン）「望遠鏡というのはただ遠い星を見るための物ではありません。人工衛星と通信する為の手段としても考えていました」

マグヌス（アン）「通信？望遠鏡で？」

ヘレン（アン）「はい。まずヘレン様は流れ星に着目したのです。流れ星では地球では滅多に見えず、そして、小さくしか見えません。そこで考えたのが、人工的に流れ星を見るための装置、人工流星衛星です」

マグヌス（アン）「人工流星衛星って、それって・・・」

ヘレン（アン）「はい、現在地球の空にあるマグヌス様が考えた衛星と同じ物です」

マグヌス（アン）「私と同じ事を考えて居たということか？でも、一言も・・・」

ヘレン（アン）「ヘレン様は敢えて言わなかったのではないかと。でも、同じ事を考えていて内心嬉しかったはずです」

マグヌス（アン）「そうか？」

ヘレン（アン）、望遠鏡を近づき、手に触れる。

ヘレン（アン）「地球に希望を与える人工流星衛星ですが、今、マグヌス様の父君、いえ、王様がそれをを用いて地球侵略しようとしています」

マグヌス（アン）、両手を強く握りしめる。

マグヌス（アン）「それを止めるため、君が持っているコードを渡さないために、逃げているのではないか」

ヘレン（アン）「だが、いつか見つかり、捕まるのも時間の問題です」

マグヌス（アン）「（食い気味に）だから、もっと何処か見つからない所へ・・・」

ヘレン（アン）、胸の扉を開ける。中

には赤く輝く丸いコアのような物が収納されている。

マグヌス（アン）、眼を丸くして、

マグヌス（アン）「そ、それは・・・？」

ヘレン（アン）「これで人工流星衛星を破壊します」

マグヌス（アン）「破壊？どうやって？」

ヘレン（アン）「これを射出機として使って、

上空の人工流星衛星を撃ち落とします」

マグヌス（アン）、拍手しながら、乾

いた笑い声をし、

マグヌス（アン）「そ、そんな物があるなら、最初から教えてよ。なら、善は急げ、破壊をしよう」

ヘレン（アン）、真顔で、

ヘレン（アン）「破壊するにはこのコアを私の身体から抜き取り必要があります」

マグヌス（アン）、不思議そうな顔で、

マグヌス（アン）「つまり・・・？」

ヘレン（アン）「私は機能停止します。だが、

これは私の使命でもありますので、気にし
な・・・」

マグヌス（アン）、ヘレン（アン）に
詰め寄る。

マグヌス（アン）「そ、そんな、君が二度も
失うのは耐えられない・・・そんな選択は
できない」

ヘレン（アン）「いえ、していただけないと
駄目です。地球がどうなっても良いのです
か？」

マグヌス（アン）、その場に膝を付く。

マグヌス（アン）「それは・・・」

マグヌス（アン）、俯く。

マグヌス（アン）「（か細い声で）やっぱり、
君を失う選択はできない・・・また、君を
失うのは御免だ」

ヘレン（アン）「では、このまま地球を侵略
するのを見ているのでしょうか？」

マグヌス（アン）「そのようなこともさせな
い、何としても」

ヘレン（アン）「では、どんな考えがあるのですか？」

マグヌス（アン）「それは・・・」

ヘレン（アン）「そうですか。時間がありますせん。やはり、このコアで破壊するのです」

ヘレン（アン）、望遠鏡に近づいていく。それを、マグヌス（アン）は必死に止める。

マグヌス（アン）「（大声で）それは駄目だ」
ヘレン（アン）「いえ、やめません」

ヘレン（アン）はマグヌス（アン）に捕まれながら、ジリジリと望遠鏡に近づいている。

突然、扉が開き、ぞろぞろと兵隊達（アン）が入ってくる。

マグヌス（アン）、驚きくが、守るよ
うにヘレン（アン）の前にスツと立つ。
兵隊達（アン）、一斉に銃を構える。

マグヌス（アン）「お前ら、なぜここがわかった？」

兵隊達（アン）の中から兵隊1（ア

ン）が前に出てくる。

アルキタスの声「ヘレンよ、詰めが甘かったな」

マグヌス（アン）「ち、父上？」

兵隊1（アン）、ヘレンを指差す。

アルキタスの声「そいつと一緒にいるのはどうも昔から好きらしいな。まあいい、そんなことは。どうやって、ここがわかったか、教えてやろうか？あ？」

マグヌス（アン）、歯を食いしばる。

アルキタスの声「悔しいだろうな、ふん。公園を忍んで抜け出したつもりだったが、うちの兵は優秀でねずみの影を見逃さなかったのさ。そのねずみがお前と分かれば後は楽だった。お前の部屋に兵を行かせ、会話を盗み聞けば、はい、袋のねずみさ」

マグヌス（アン）「クソッ・・・」

アルキタスの声「お前達、引っ捕らえろ。息子も構わん」

兵隊達（アン）、マグヌス（アン）を
捕まえよう

とすると、マグヌス（アン）が兵隊（
アン）を抑え込む。

マグヌス（アン）「へレン、逃げる」

へレン（アン）、兵隊達（アン）を掻
い潜り、逃げようとするが、捕まる。

アルキタスの声「おっと、我が息子ながら、
邪魔だな」

兵隊1（アン）、何かを手に持つ仕草
をする。

アルキタスの声「おい、捕まえろ」

○メテオール星・マグヌスの部屋の中（夜）
兵隊二人が部屋の扉を押し破って入っ
てくる。

マグヌス、慌てて、振り返る。

兵隊二人、銃を構える。兵隊の一人が
「王子、両手を上げてください」と告
げる。マグヌス、悔しい顔で両手を挙

げる。すると、兵隊二人の後ろからアルキタスが登場する。マグヌス、アルキタスを睨みつける。

アルキタス「何だい、父に向かって、その目付きは？分かっていると思うが、抵抗すれば、息子とて容赦しない」

兵隊の一人がマグヌスの両手を縛る。
マグヌス「ヘレンに何かしたら、父親だろうと容赦しない」

アルキタス、鼻で笑う。
アルキタス「牢屋にぶち込んでおけ」

兵隊二人は敬礼する。アルキタスは不気味に笑う。

アルキタス「これで地球は私の物だ」
マグヌス、兵隊に連れられながらも、アルキタスを睨み続ける。

○同・フィロン王国・牢屋（夜）

兵隊1、マグヌスを牢屋に入れ、鍵をかける。鍵は兵隊1のズボンの左側に

かける。

マグヌス、悔しい顔で壁に凭れて、座る。

マグヌス「また、君を失ってしまうのか・
」

マグヌスの眼から一粒の涙が頬をつたう。そして、目を瞑る。

× × ×
(フラッシュ)

ヘレン(10)、振り返り、笑顔。

× × ×

牢屋を上側に格子状の小窓がある。その窓から夜空が覗き、流れ星が流れる。マグヌス、流星が流れる瞬間、流星に向けて手を伸ばす。

マグヌス「ヘレン、私の願いは・・・」

マグヌス、手を握るが、流星が握り拳から溢れ落ちる。

○ (回想) 同・丘の上(夜)

マグヌス(10)とヘレン(10)、丘の上で
並んで寝転んでいる。夜空には星空。

ヘレン、流れ星を握り損ねる。腕を伸
ばしながら、

ヘレン「マグヌスは願うとしたら、どんなこ
と願うの？」

マグヌス、考え込む。

マグヌス「僕は・・・」

ヘレン「(マグヌスに顔を向けて)僕は？」

マグヌス「(恥ずかしそうに)ヘレンの願
いが叶いますように」

ヘレン「(クスツと笑う)何それ」

○同・フィロン王国・牢屋内(夜)

握り拳を掲げるマグヌス。

マグヌス「ヘレン、君の願いはいつ叶うんだ
？」

格子窓から星空が覗く。

マグヌス「私はいつも無力だ・・・どんなに
思ってもあの時には戻れない・・・」

星空に流れ星が流れる。すかさず、流れ星を握ろうとするが、握り拳から流れ星が握り損ねる。溜息をつく。

マグヌス「神様はヘレンの願いを叶いさせるのは今ではないと言っているのか？」

× × ×

(フラッシュ)

ヘレン(10)、隣で笑う。

× × ×

マグヌス「私の本当の願いは・・・(涙溢れる)ただ、君の側に居続けたかっただけなんだ」

マグヌス、起き上がる。

マグヌス「ここでうだうだ言っても、何も変わらない・・・君を二度も失いたくない」

マグヌスは格子窓の下の方、床近くに壁から鉄筋が出ていることに気づき、考え込む。何かを思い付いた表情をするマグヌス。

マグヌス、上着を脱ぎ、格子窓へ飛び

つき、

ガツシリと格子を掴む。そして、格子に上着を通し、袖同士を括り付け、輪っかを作る。

その輪っかにゆっくり首を通す。

○同・牢屋前（夜）

兵隊1、腰に付けた鍵の束をじゃらじやらと鳴らしながら、牢屋に近づき、覗き込む。しかし、真っ青な顔にみるみるとなる。

兵隊1「お、王子!？」

マグヌスは首を吊ってぐったりしている。兵隊1、慌てふためきながら、鍵の束を手に取り、牢屋の鍵を探す。何度も何度も鍵を間違えるが、やっと扉を開き、マグヌスに駆け寄る。

○同・牢屋内（夜）

マグヌスの首に巻かれた上着の袖を必

死に解こうとする。

兵隊1「く、クソッ！こんなことがバレたら、
処刑される」

マグヌス、目を開く。兵隊1、驚き、
尻餅をつく。マグヌス、平然とした顔
で、

マグヌス「（笑顔で）驚いた？」

マグヌス、首に巻かれた袖を外し、壁
から出ている鉄筋の上に乗っているが、
そこから降りる。

兵隊1「お、王子、死に真似を・・・」

マグヌス、兵隊1に馬乗りになり、

マグヌス「おやすみ」

マグヌス、兵隊1の顎を思いっきり、
殴る。

兵隊1はぐったり倒れる。マグヌス、
兵隊1の腰に掛かっている鍵を奪い、
牢屋の扉に鍵を締め、牢屋を去る。

○同・マグヌスの部屋前（夜）

マグヌス、忍び足でゆっくり歩き、辺りをきよろきよろと見渡す。ゆっくりと扉を開け、部屋に入る。

○同・マグヌスの部屋内（夜）

マグヌス、扉をゆっくり閉める。部屋は踏み荒らされた跡がある。部屋を見渡し、床にゴーグルが落ちているのに気づく。

マグヌス「（小声で）よし、持って行かれてなかった」

マグヌス、安堵する。ゴーグルを手に取り、部屋を出ていく。

○同・丘の上（夜）

マグヌス、息を切らし、登っている。崩れるようにその場に座り込む。

マグヌス「ここなら、父上にも見つからないだろう」

丘の上にはクレータ。

マグヌス、手に持ったゴーグルを見つめる。

マグヌス「ヘレン、今行く」

マグヌス、クレータを見つめ、ゴーグルを頭に装着する。

○地球・アルヒェンホルト天文台・望遠鏡室
(夜)

机の上に開いたアタッシュケースが置かれ、中には送受信装置がある。兵隊2（アン）、カタカタと装置を動かしている。その装置からコードが伸びている。その先には上の空のヘレン（アン）。首元からコードが伸びている。隅の壁に機能停止のマグヌス（アン）が置かれている。すると、マグヌス（アン）の腕がピクリと動く。顔をゆっくり上げ、目には生気が宿る。辺りを見渡し、兵隊2（アン）が装置をイジっている姿

が目に入る。マグヌス（アン）、音をたてずに立ち上がる。

アルキタスの声「ダウンロードはまだか？」

兵隊2（アン）「あと、5分です」

アルキタスの声「急げ」

兵隊2（アン）「ハッ」

兵隊2（アン）、装置の画面を凝視。

画面の数值は『95、96、97、9

8』と数值がどんどんと大きくなっていく。

兵隊2（アン）の後ろにマグヌス（アン）が鉄パイプを持って、近づいてきている。そして、鉄パイプを振り上げて、兵隊2（アン）の頭目掛けて、思いっ切り振り下ろす。兵隊2（アン）はパチッと放電し、倒れる。画面の数值は99となる。

○メテオール星・フィロン王国・司令室（夜）
兵隊2のゴーグルが壊れる。アルキタ

ス、怒鳴り、

アルキタス「おい、どうなっている？」

兵隊2「（慌てて）誰かによって、アンドロ

イドが機能

停止させられたようです」

アルキタス「役立たずが。（不敵な笑み）だ

が、ダウ

ンロードは完了したようだ」

画面の数値は100と表示。

アルキタス「邪魔者はどうせマグヌスだろう。

どうや

って抜け出したかわからんが、私の邪魔を

するのならば、排除せよ。あと、用済みの

アンドロイドも破壊せよ」

兵隊の一人が「お、王子を排除ですか

？」と

恐れるように言う。

アルキタス「何度も言わせるな、邪魔者は排

除せよ」

兵隊達、一同に「ハッ」と言い、敬礼

する。

アルキタス「あつ、一人は残れ。これから地球を攻撃の準備に移る、（指を指し）貴様、残れ」

兵隊3 「（敬礼）ハッ」

○地球・アルヒェンホルト天文台近くの道（

夜）

点々と立っている貧しそうな街の人々が怯えている。

マグヌス（アン）がヘレン（アン）の手を取り、走っている。後ろから、兵隊達（アン）が追いかけている。

兵隊達（アン）「待てえ」

道の先に陸橋があり、その奥に森が見える。

マグヌス（アン）「橋の向こうに森に逃げよう」

陸橋に向かうマグヌス（アン）と手を引かれたヘレン（アン）。

○同・陸橋の上（夜）

陸橋に向かうマグヌス（アン）と手を引かれたヘレン（アン）。後ろから兵隊達（アン）が追いかけてくる。

マグヌス（アン）「しつこい奴らだ」

マグヌス（アン）ヘレン（アン）、陸橋の中央辺りに来ると、前方から兵隊達（アン）が来ていることに気づく。

マグヌス（アン）「くっ、先回りされていたか」

マグヌス（アン）とヘレン（アン）、その場に急停止する。

前方の兵隊達（アン）が銃を構え、並列している。後方から銃を構えながら、兵隊達（アン）がにじり寄ってくる。マグヌス（アン）が前後をキョロキョロする。

兵隊の一人から声が発せられる。

アルキタスの声「マグヌス、どうやって牢を抜け出したかは聞かんが、もう貴様は息子

ではない、我がフィロン王国の反逆者だ。

分かってているだろう、反逆者の末路を」

マグヌス（アン）「へっ、もうとうの昔にあんたとは親子の縁を切らせてもらっている。好きにすればいい。だけど、この子だけは壊させはしない」

アルキタスの声「それは無理な相談だ。そのアンドロイドは反逆者が作った代物、例外なく、壊させてもらう。それにそいつがこの世にあっては、私の計画を壊される恐れもある。有害因子は一人、いや一アンドロイド残らず壊し尽くす」

マグヌス（アン）「ふん、救いようのない人だ。この子はこの星に幸せを運ぶ女神のような存在、そう簡単に思い通りさせてたまるか」

アルキタスの声「ほざけ。お前達、容赦するな、撃て」

前方後方の兵隊達（アン）が銃を構え、にじり寄ってくる。

マグヌス（アン）、歯を食いしばり、
辺りを見渡す。川の方に目が止まる。

マグヌス（アン）「ヘレン、走るぞ」

ヘレン（アン）「どうするの？」

マグヌス（アン）「懸ける」

マグヌス（アン）、ヘレン（アン）の
手を引っ張り、川の方へ走る。

アルキタスの声「おい、逃がすな」

兵隊達（アン）、マグヌス（アン）達
に向けて、銃を乱射する。

マグヌス（アン）達の横を弾丸が通過
し、一発がマグヌス（アン）の頬を掠
める。それを顧みず、走り続け、川に
飛び込む。

アルキタスの声「くっ」

兵隊達（アン）、川の方へ駆け寄り、
下を確認する。

川の流れは早く。マグヌス（アン）達
の影は速いスピードで流されていく。

アルキタスの声「アンドロイドだ、浮いて

こない。ふふふ、自滅しやがって。さあ、
貴様ら、邪魔者は居なくなった。計画が崩
されかけたが、問題ない。急ごう、メテオ
ール星の未来のために」

兵隊達（アン）、一斉に「ハッ」と
言い、敬礼する。

○同・シュプレー川・水中（夜）

マグヌス（アン）がヘレン（アン）を
抱え、流される。必死に悶ながら、水
面に出ようと泳ごうとするも、徐々に
沈んでいく。川の底は暗く、深い。

× × ×

マグヌス（アン）、藻掻き、水面を目
指し、泳ぐ。だが、マグヌス（アン）
は動きを止め、ゆっくり沈んでいく。
川の中から夜空が見え、無数の流れ星
が流れている。

マグヌス（アン）、夜空に手を伸ばし、
流れ星を掴もうとするが、虚しく水を

掴むだけ。そして、口をパクパクし、何かを話そうとする。静かに目を瞑り、ヘレン（アン）を抱えながら、暗い川底に沈んでいく。

ヘレン（アン）、マグヌス（アン）と額同士をくつつける。すると、白く輝く。

○ 白い世界

上から光が照らされ、周りは真っ白。マグヌス、照らされる光の中、立っている。ゆっくり目を開く。

マグヌス「ここは・・・？」

マグヌス、辺りを見渡す。

マグヌス「真っ白、天国のようだ・・・」

ヘレン「おーい、マグヌス」

マグヌスの後ろで笑顔でぴよんぴよん跳ねているヘレン。

マグヌス、振り向かず、考え込む。

マグヌス「だけど、私って川の中に居たけど、

それはアンドロイドでの話だし：」

ヘレン、ぴよんぴよん跳ねている。

ヘレン「おーいってば」

マグヌス「でも、現に天国に似た場所にいるし、私って死んだのか？」

ヘレン、ぴよんぴよん跳ねている。

ヘレン「聞こえている？それとも無視？」

マグヌス「だとしたら、実体は（足元を見る）あるか」

ヘレン、怒った表情でどこかかとマグヌスに向かってくる。そして、背中を蹴っ飛ばす。

ヘレン「はよお、気づかんか、バカ」

マグヌス、吹っ飛び、地面に転がる。

そして、驚いて、振り返る。

マグヌス「えっ？えっ？」

ヘレン「（笑顔）やっと、こっちを向いてくれた」

マグヌス「（戸惑う）へ、ヘレン？」

ヘレン「なくに、その幽霊を見たような顔。」

傷つくな、まあ死んでいるんだけどね」

マグヌス「へ、ヘレン、ヘレンなのか」

マグヌス、涙を流し、ヘレンに近づき、抱きしめようとする。だが、ヘレンは押し退ける。

ヘレン「あんたはいつまで私に執着しているのよ」

マグヌス、きよとんとする。

マグヌス「久しぶりの再開なんだ、ちよつと

は喜んでくれても・・・」

ヘレン「喜びよりも呆れて物が言えないね。」

私への執着はやめて、地球の未来を守って」

マグヌス「僕は君のほうが大事なんだ」

ヘレン「いい？昔誓ったよね？あなたの願い

は私の願いを叶えることだって」

マグヌス「それは昔の話だ」

ヘレン「お願い、この地球を守って、そして、未来を作って、これが私の願いなの。私は魂だけの存在。もうあなただけなの、頼れるの」

ヘレン、マグヌスの手を握る。マグヌス、戸惑う。

ヘレン「コアを使って、人工流星衛星を破壊して」

マグヌス「それを使ったら、君が・・・」

ヘレン「地球を守れるのなら本望だわ。それにいつまでも僕はあなたの側にいるわ」

ヘレン、マグヌスを抱きしめる。

マグヌス、涙を流し、強く抱きしめる。

マグヌス「ごめん、ごめんね・・・」

ヘレン、涙を流す。

ヘレン「地球を、私の好きな場所を救ってきて・・・」

マグヌス、何度も頷く。ヘレン、マグヌスの額と自分の額同士をくっつける。

ヘレン「さあ、流れ星を掴んで」

白く輝き、ヘレンとマグヌスを光が包む。

○同・シュプリー川・水中（夜）

マグヌス（アン）、目を開ける。

夜空を見ると流れ星が流れる。

マグヌス（アン）、流れ星を掴む。

マグヌス（アン）「行ってくる」

握った拳を開くとコアがある。

ヘレン（アン）、マグヌス（アン）を

押し退け、川底に沈んでいく。口元は

笑っている。マグヌス（アン）、沈ん

でいくのを見届け、水上に向かう。

ヘレン（アン）「また・・・会おうね・・・」

ヘレン（アン）、水底の暗闇に消える。

○地球・シュプレー川・水上（夜）

マグヌス（アン）、水から顔を出し、

辺りを見渡す。

マグヌス（アン）「だいぶ流されてしまった

な」

マグヌス（アン）、岸まで泳ぐ。

○同・岸边（夜）

マグヌス（アン）、這いずるように岸
辺に上がる。

マグヌス（アン）「早く、天文台に戻らない
と・・・」

マグヌス（アン）、走る。

○メテオール星・フィロン王国・司令室（夜）

兵隊3、PCを操作している。後ろで
腕を組んで立っているアルキタス。

アルキタス「ははは、これで地球の資源は私
のものだ。地球人よ、滅べ、ははは」

兵隊3「恐れ入りますが、本当にやるのでし
ょうか？」

アルキタス「今になって、何を怖気づいてい
る。つべこべ言わず、作業を進めろ」

兵隊3「ハッ」

兵隊3、PCを操作する。

アルキタス「もう誰にも止められないぞ、は
はは」

アルキタス、ふんぞり返る。

○地球・アルヒェンホルト天文台前（夜）

マグヌス（アン）、手のコアを見る。

マグヌス（アン）「待っている、父上」

マグヌス（アン）、建物に入っていく。

○メテオール星・フィロン王国・司令室（夜）

兵隊3「準備ができました」

アルキタス「よし、この時がとうとう来たか」

アルキタス、薄ら笑いをする。

アルキタス「ボタンは私が押そう」

兵隊3「ハッ」

兵隊3、席を立ち、アルキタスの後ろに姿勢良く立つ。

モニター画面には、『攻撃モード待機

中』と表示。

アルキタスの指先が画面にゆっくり近

づいていく。そして、笑いながら、

アルキタス「笑いが止まらないわ」

○地球・上空（夜）

宇宙に漂っている人工流星衛星が緑色のランプが点滅している。

○地球・アルヒェンホルト天文台内（夜）

マグヌス（アン）、モニター画面を指でタイプしている。

マグヌス（アン）「動け、動け、動け」

× × ×

ドームのスリットが開き、望遠鏡が開いたスリットの方に姿勢を向ける。

マグヌス（アン）「よくやった」

マグヌス（アン）、モニター画面を指でタイプしている。

マグヌス（アン）「次は衛星に望遠鏡を向けなくては」

× × ×

望遠鏡がある方向を向いて、停止する。
望遠鏡が向いた先には夜空に緑色に点滅している光。

マグヌス（アン）「（ガッツポーズ）よし」

マグナス（アン）、望遠鏡の前に近づき、立ち止まる。手に持ったコアを見つめる。

○地球・上空（夜）

人工流星衛星が緑色ランプから赤色ランプに切り替わり、点滅する。

人工流星衛星のLCDに『攻撃モード』と表示される。

○メテオール星・フィロン王国・司令室（夜）

アルキタス「攻撃開始」

アルキタス、モニター画面を指で押す。

○地球・アルヒェンホルト天文台内（夜）

マグナス（アン）「ヘレン、地球の願いはあんなの無くても叶うよ」

マグナス（アン）、コアを握りしめる。

望遠鏡にコアをセットする。

マグナス（アン）「さよなら、ヘレン。そし

て、地球に幸あれ」

夜空には赤く点滅する光。

コアが強く光りだす。望遠鏡から赤いレーザーが夜空に射出される。

○地球・上空（夜）

人工流星衛星の赤色ランプの点滅間隔が早くなり、震えだす。

○メテオール星・フィロン王国・司令室（夜）

モニター画面に『攻撃モード』と表示。
アルキタス、高らかに笑う。

○地球・上空（夜）

人工流星衛星に赤いレーザーが命中する。すると、ランプが赤色と緑色と交互に点滅する。

○地球・アルヒェンホルト天文台内（夜）

夜空に赤色と緑色の光が点滅している。

マグヌス（アン）「（大声で）止まれ！」

○地球・上空（夜）

徐々にランプの光が小さくなり、最終的にランプが消える。

○メテオール星・フィロン王国・司令部（夜）

モニター画面の表示が『攻撃モード』から『停止』と変わる。

アルキタス、モニター画面に齧り付く。

アルキタス「おい、どうした、どうした？ どうなっている？」

兵隊3「な、何者かに、衛星を停止させられました」

アルキタス「誰がこんなことを・・・まさか、マグヌスカ、クソお」

アルキタス、モニター画面を殴る。

○地球・アルヒェンホルト天文台内（夜）

マグヌス（アン）、夜空を見つめる。

マグヌス（アン）「ヘレン、これでいいんだ

よね」

マグヌス（アン）、掌を見つめ、握り
める。

マグヌス（アン）「ヘレン、終わらせてくる」

マグヌス（アン）、目を瞑る。

○メテオール星・丘の上（夜）

マグヌス、目を開ける。

マグヌス「父上、お覚悟を」

マグヌス、走り出し、スマホで何処に
電話を掛ける。

○同・フィロン王国・司令室（夜）

アルキタス、両手でモニター画面を叩
きつける。

アルキタス「クソお、マグヌスが」

兵士達、身体をビクツとさせる。

アルキタス「お前等がマグヌスを仕留めそこ
ねたから、私の計画がめちゃくちゃだ。お

前等、消えやがれ」

アルキタス、銃で兵隊3を撃つ。

兵隊3「（胸を押さえる）うう」

兵隊3、血を流し、倒れる。

兵隊達、怯え始める。

兵隊の一人が『やめてください』と声

が震えながら言う。

アルキタス「使えない奴らは消えろ」

アルキタス、兵隊の一人に銃を構える。

怯える兵隊。

アルキタス、トリガーの指をかける。

マグヌス「やめろ」

マグヌス、アルキタスに銃を構える。

アルキタス、マグヌスの方に向く。

マグヌス「父上、あなたの野望はここまでだ」

アルキタス「誰かと思えば、愚息か」

アルキタス、マグヌスに近づこうとす

るが、マグヌスは銃を再度突きつける。

マグヌス「動くな」

アルキタス「撃つのか？撃ってみる？その時

は王国警察がお前を・・・」

マグヌス「その王国警察だが、もうあなたの
思い通りに動きませんよ」

アルキタス「何？」

警察隊が扉からぞろぞろと入ってくる。
そして、アルキタスの銃を向ける。

アルキタス「おい、貴様等、向ける相手が違
うぞ。(マグヌスに指を指す) さあ、あ
いづつを引っ捕らえろ」

マグヌス「あなたはもうこの国を、そして地
球を好き勝手にはさせません」

アルキタス「自惚れるな。貴様のような臆病
で過去に拘る奴にこの国を生まれ変わらせ
ることができるか」

マグヌス「今までの僕ならばできなかつただ
ろう。だけど、人は想いを託されると強く
なれると気づいた」

アルキタス「ふん、何処が変わった？」

マグヌス、アルキタスの足元を撃つ。

マグヌス「もうあなたに恐れない」

アルキタス「（険しい顔）小癩な」

アルキタス、不敵な笑みをこぼす。

アルキタス「マグヌスよ、貴様は言ったよな。

この国、地球を好き勝手にはさせないぞっ

と。だけどな、貴様の行為はこの国を衰退

させる行為だぞ」

マグヌスカ、銃を構えたままじつとア

ルキタスを見る。

アルキタス「この国を地球の資源以外でどう

立て直せる？無理な話だ。貴様のわがまま

で国を破滅する道を選んだのだ。どうする

？このままでは貴様のせいでこの国は終わ

るのだよ」

マグヌス「地球の資源があれば、この国は良

くなるだろう。だが、地球を犠牲にして、

行うことではない。何度も言うが僕は両方

救う、絶対に」

アルキタス「どうやって？地球以外から資源

を探すか？新しい資源を生むための物を開

発するのか？時間がないんだぞ、夢物語だ」

マグヌス「願うのですよ」

アルキタス「ふん、夢物語どころか、神業に頼るのか、くだらない」

マグヌス「くだらなくても、僕は信じる。この国を。父上は目が曇りすぎた。願いは掴めます」

アルキタス「意見の相違だ。息子ながら、いつまでも分かりあえそうにないな」

アルキタス、マグヌスの方を向きながら、モニター画面を操作する。

マグヌス「それでもあなたは僕の父親だ。いつかわかりあえると思っています」

アルキタス「ふん、私の居ない所で勝手にやっている」

アルキタス、モニター画面のボタンを押す。

ブザー音がなる。

マグヌス「な、なんだ」

アルキタス「私はこんな所で捕まってたまるか」

マグヌス「何をした？」

アルキタス「うつつを抜かすような頭だから、
忘れるんだ。人工流星衛星は地球にだけに
あるわけではない」

マグヌス「ま、まさか」

○同・上空（夜）

人工流星衛星が緑色ランプから赤色ラ
ンプに切り替わり、点滅する。

人工流星衛星のLCDに『攻撃モード』
と表示される。

○同・フィロン王国・司令室（夜）

アルキタス、高らかに笑い出す。

アルキタス「さあ、早く逃げないと、怪我で
は済まないぞ」

警察隊達が逃げ惑う。

マグヌス、依然とアルキタスに銃を構
えている。

アルキタス「貴様はなぜ逃げない？」

マグヌス「言葉を返そう、なぜあなたは逃げない？」

アルキタス「さあ、教えない」

マグヌス、唇を噛む。

アルキタス「ほら、慌てふためけ」

○同・上空

人工流星衛星から、大きな鉄屑が射出され、地上に向かって落ちていく。鉄屑は赤く包まれる。

○同・フィロン王国・司令室（夜）

銃を構えたマグヌスとアルキタスが対面している。

アルキタス「どうした？ 貴様も逃げないのか？」

マグヌス「どんな父親だろうと見捨てることはできない。今なら間に合う、さあ、こつちへ」

アルキタス「ふん、願い下げだ。それに僕は

死ぬつもりは毛頭ない」

マグヌス、険しい顔。

外から轟音が鳴り響く。

○同・同・外（夜）

赤く燃える鉄屑が城に迫っている。

○同・同・司令室（夜）

アルキタス「ほら、死の音が近づいているぞ」

マグヌス、険しい顔。

すると、城壁を鉄屑が破壊する。土煙

が部屋中を覆う。

マグヌス、吹き飛ばされ、壁に打ち付

けられる。

× × ×

マグヌス、目を覚まし、辺りを見渡す。

部屋の中はグチャグチャ、天井から壁

にかけて大きな穴が開いている。

マグヌス「父上？」

マグヌス、見渡しても、アルキタスの

姿はない。

マグヌス「生きてられるのか・・・」

天井の穴の隙間から夜空が見え、一つの流れ星が流れる。

マグヌス「ヘレン、地球とメテオールはこれからが再出発だ」

○メテオール星・工場地帯（昼）

T「三年後・・・」

トラックが行き来し、そこで働く人達の活気で溢れている。

○地球・繁華街（夜）

バーや居酒屋で賑わう人々達。明るく照らされる街中。その中を嬉しそうに歩くマグヌス(21)。手には花束を持っている。

○地球・アルヒェンホルト天文台前（夜）

墓石に「ヘレン・ビザンチウム」と彫

られている。花束を置く、マグヌス。

マグヌス「君との願いはまだただけど、地球もメテオールも元気を取り戻し始めたよ」

マグヌス、一粒の涙を流す。

マグヌス「どちらの星の再建は苦しく大変だけど、君の願いだ、なんとしてもやり遂げるよ。でも、君と一緒にやれたら、もっと楽しくだろうね。タラレバの話をしてても仕方がないか」

夜空に一つの流星が流れる。マグヌス、夜空を見上げる。

マグヌス「（微笑む）地球にもやっと幸せが降り注ぎ始めたな」

マグヌス、夜空に手を伸ばす。流れ星が流れる。それを掴むマグヌス。

マグヌス「ヘレン、見守っていてね」

マグヌス、墓石に一例し、歩き出す。流れ星が燃え尽きず、地上に落ちる。

○同・シュプレー川（夜）

小石程の流れ星が川に落ちる。

○同・同・水中（夜）

ヘレン（アン）、川底に大の字で沈んでいる

。すると、掌に流れ星が落ちる。

○（回想）メテオール星・丘の上（夜）

マグヌス（10）とヘレン（10）は向き合っている。

ヘレン「実はね、私、もう一つ願いがあるの」
マグヌス「どんなの？」

ヘレン「それは…（少し顔が赤くなる）やっぱり止めた」

アルキタス「え？え？そこでやめる？普通」
ヘレン「（笑顔で）また…何処かでね」

マグヌス「はあ」

ヘレン、夜空を見上げる。マグヌスも夜空を見上げる。ヘレンは横目でマグヌスを見る。

ヘレンM「ずっと一緒に居たいなんて言えないよ」

マグヌス、ヘレンの方を見る。

マグヌス「どうしたの？」

ヘレン「（少し顔が赤い）うんうん、何でも
ない」

マグヌス「ふーん」

ヘレンは笑ってごまかす。

○地球・シュプレー川・水中（夜）

ヘレン（アン）、微笑みながら掌に乗った流れ星を握りしめる。

〈了〉